

文・献・抄・録

脊損および健常男子大学生間の対話内容の分析

Content Analysis of Verbal Communication between Spinal Cord Injured and Nondisabled Male College Students/ Mesch, J.C.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., **57**, 25-30, 1976.

【コミュニケーション, 障害, 脊髄損傷】

外傷性脊髄障害を有する45名(うち43名は車いす生活者)と健常者45名, 計90名の男子大学生を選び, 健常者2名(N-N), 障害者2名(D-D), 障害者と健常者(D-N)の3種の組合せを各15組作り, 3段階の親密度の話題についての対話を各組ごとに録音して分析に供した。話題の親密度は, 余暇の過ごし方, 賞賛や批評に対する反応の仕方, 異性との関係の順に低・中・高度とした。分析の結果, 自己を表わす程度は, D-N組が高親密度の話題に最も強く, 次にD-D組が低・中度の話題に強い。N-N組では, すべての話題を通じて低かった。障害者自身が, 障害に関連した語を用いる頻度は, D-D組では, 各話題とも高いが, D-N組では, 前者の1/4~2/3で, 親密度の低い話題ほど低頻度であった。2人間の雰囲気は, D-N組が, 最もぎこちなく, D-D組は, すぐにうちとけあっていた。これらの結果は, リハにおけるスタッフと障害者の意思疎通やカウンセリングに参考となろう。(こども医療センター 陣内 一保)

顔面神経麻痺の予後

Prognosis in Bell's Palsy/Granger, C.V.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., 57, 33-35, 1976.

【顔面神経麻痺, 筋電図】

顔面神経麻痺の予後を, 発症後早期に予測する方法について述べた論文である。発症後10日以内に初診した90例の本症例についての観察を行い, 顔面筋の筋力テストならびに筋電図学的検査より, 予後を予測した。筋力テストは, 健側と対比し, 筋力が10%以下に低下しているものを, 筋力消失としたが, 発症後10日までの筋力の最も低下した状態のときにも, 筋力消失のなかった症例(90例中45例)は, すべて発症後2ヵ月以内(ほとんどは30~45日)に回復している。筋力消失と判定された残りの45例も, 口輪筋外側部, 後耳介筋, 前頭筋, 眼輪筋, 頬骨筋の5筋から, 針電極で誘導した筋電図のうち, 4筋以上に motor unit potential がみられれば, 同じく2ヵ月以内に回復し(26例), 2~3筋ならば4~6

ヵ月後に回復(6例), 0~1筋にしかみられなければ, 回復には6ヵ月以上を要するか, または回復不完全であった(13例)。予測に最適の時期は, 発症後4日目(72時間後)であった。

(こども医療センター 陣内 一保)

小児に発症した Malignant atrophic papulosis

Malignant atrophic papulosis (Kohlmeier-Degos disease) in childhood / Horner F.A. et al.: Neurology, 26, 317-321, 1976.

【小児, Malignant atrophic papulosis】

Malignant atrophic papulosis は, 成人では, 致死的な進行性神経疾患を起こすまれな原因としてよく知られている。この疾患に特有なのは皮膚病変で, 腸管穿孔や腹膜炎を伴うことも多い。原因は, ヴィールス感染, なかでも slow virus infection, 代謝異常, 自己免疫異常, などが考えられるが, 未だに定説はなく不明である。病理所見では, 表皮が著明に萎縮しているのが特徴で, 組織の thromboangitis obliterance の所見がみられ, このために, C.N.S. や腸管の組織が necrosis に陥る。Henkind により, この疾患が小児にも発症することがいわれていたが, 著者らは, 生後3ヵ月目に papulosis ができ, その後著変なく6年後にはこの疾患特有の血管閉塞による致死的な進行性神経荒廃に陥った一例を報告した。一見して無害な皮膚病変であり, 数週間後には瘢痕化するため見のがしがちであるが, 多発性の神経荒廃に進行していかないかどうかを, 追求すべきである。

(川崎医大 森田 能子)

老年期痴呆患者の行動・心理評価に及ぼす高圧酸素療法の影響

Effects of Hyperbaric Oxygen on Behavioral and Physiological Measures in Elderly Demented Patients / Thompson, L.W. et al.: J. Gerontology, 31, 23-28, 1976.

【老年期痴呆患者, 行動・心理評価, 高圧酸素療法】

従来, 高圧酸素療法を老人に行った場合, その脳機能に改善ありとするものと, なしとするものがあるが, 対象疾患による差(脳萎縮性のものには効果なく, 血管性, 心肺性の低酸素状態には効果ありとする), あるいは検査項目による差であろうと考えられる。今回は21人の老年期痴呆患者(50~80歳, 13人は気脳で確かめた皮質萎

縮, 8 人は脳血管障害によるもの) について高圧酸素療法を行い (2.5 気圧 100% の酸素中に 1 日 2 回, 90 分間), その前後で, 心理および行動評価, 脳血流量, 脳波などの測定を行った. 心理テストは, Wechsler Memory Scale, Benton 視覚記憶力テスト, Raven Progressive Matrices, Hooper Visual Organization など, また行動評価には Stockton Geriatric Scale と ADL Scale を用いた. また脳血流量には Xe^{133} の吸入により無侵襲に行った. 以上の諸検査, 評価において, すべての例に, またすべての項目に有意の変化はみられず, また治療後 2~8 週後までの Follow-up でも有意な変化はみられず, このような目的での高圧酸素療法は無意味と考えられる.

(七沢病院 福井 園彦)

慢性関節リウマチ滑液中因子による免疫グロブリン合成の抑制と促進

Suppression and stimulation on immunoglobulin synthesis by agents present in rheumatoid synovial effusions / Rosenthal, M.: Rheumatology & Rehabilitation, **15**, 71-76, 1976.

【RA, 滑液中因子, 免疫グロブリン, リンパ球】

class. ないし defin. RA の膝滑液を正常人の末梢血リンパ球と incubate し, 対照として非 RA (強直性脊椎炎, ライター症候群, 外傷性関節炎) の滑液を用いたものについて, dye exclusion test を行ったところ, 滑液 0.01 ml, 0.05 ml, 0.25 ml を加えたいずれのものにも両者に差がなく, またプロテイン合成をしらべた結果においても両者に差がなかった. 一方, 正常人末梢血リンパ球培養液に滑液をそれぞれ 0.005, 0.01, 0.05, 0.10, 0.20, 0.25 ml 加えたものについて, RA と非 RA 滑液の免疫グロブリン合成作用を radioactive immune coprecipitation assay によってしらべたところ, 対照と比較して RA 滑液では 0.005 ml ですでに促進効果がみられ, 0.01 ml で最高に達し, それ以上では刺激効果は減少し,

0.25 ml では合成は認められなかった. RA 滑液には遅延型過敏反応の mediator がすでに認められており, またこの mediator の関節内注入によってある程度 RA に似た慢性骨膜炎が起ることがわかっている. さらに T-cell によると思われる可溶性抑制 mediator もあることを考え合わせ, 免疫グロブリン合成促進あるいは抑制が同一因子の濃度差によるものか, 別の因子によるものかについて今後の検討が必要である

(中伊豆温泉病院 間 得之)

失語症患者のコミュニケーション能力に対する配偶者の理解

Spouses' understanding of the communication disabilities of aphasic patients / Joseph W. Helmick, Toshko S. Watamori, John M. Palmer: Journal of Speech and Hearing Disorders, **XLI**, 238-243, 1976.

【失語症, 家族の理解, 回復】

失語症は家族ぐるみの病気であるともいわれ, 患者の言語能力に対する家族特に配偶者の理解の程度が, 失語症の回復に及ぼす影響は大きい. 本研究では, こうした失語症患者の言語能力に対する配偶者の理解の程度を測定するために, ① 11 人の失語症患者 (男 6 女 4) の言語能力を実験者が PICA で測定し, ② 各々の患者の配偶者および担当の言語治療士に患者の言語能力を FCP (Functional Communication Profile) を用いて評価させた. その結果, ① で測定された失語症の重症度と, 担当の言語治療士による FCP 評価とは高い相関を示した. これに対して, 配偶者による FCP 評価は, 言語治療士による FCP 評価に比し有意に高く, 重症度が増すに従い両者の差が開く傾向が認められた. すなわち, 失語症患者の配偶者は, 患者の言語能力を実際より高く評価しがちであるという結果を得た. 言語治療士は, このことをよく考慮して家族に適切なカウンセリングを行うべきであると, 著者らは結論している.

(都養育院 遠藤 教子)